

沢田先生が二本目のサーブを出した。今度はバックの奥へ伸びてくる横回転サーブ。このレシーブも、ラケット角度を誤って拓はミスした。

サーブ権が拓に移った。左手の手のひらに球を載せ、相手をにらむ。沢田先生と目が合った。沢田先生の目を見た瞬間、涙がじわりと出てきて、思わず、拓は目をそらした。にじんで見える球を、目を一度つぶってから開いてしっかり見つめる。すうっと高く投げ上げる。上がっていく球を追っていくと、また涙がこみ上げてきた。

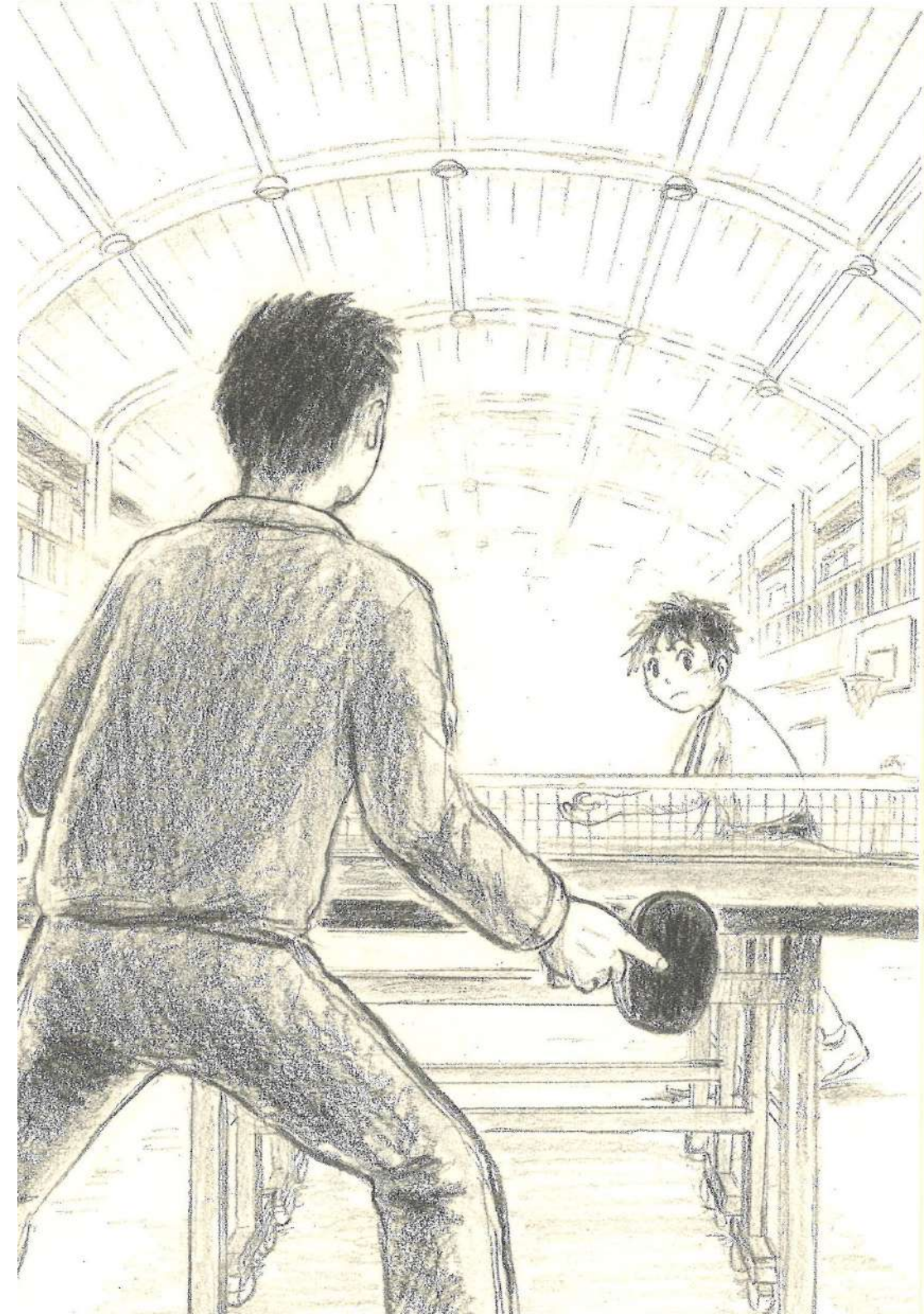
(な、なんでだよ)

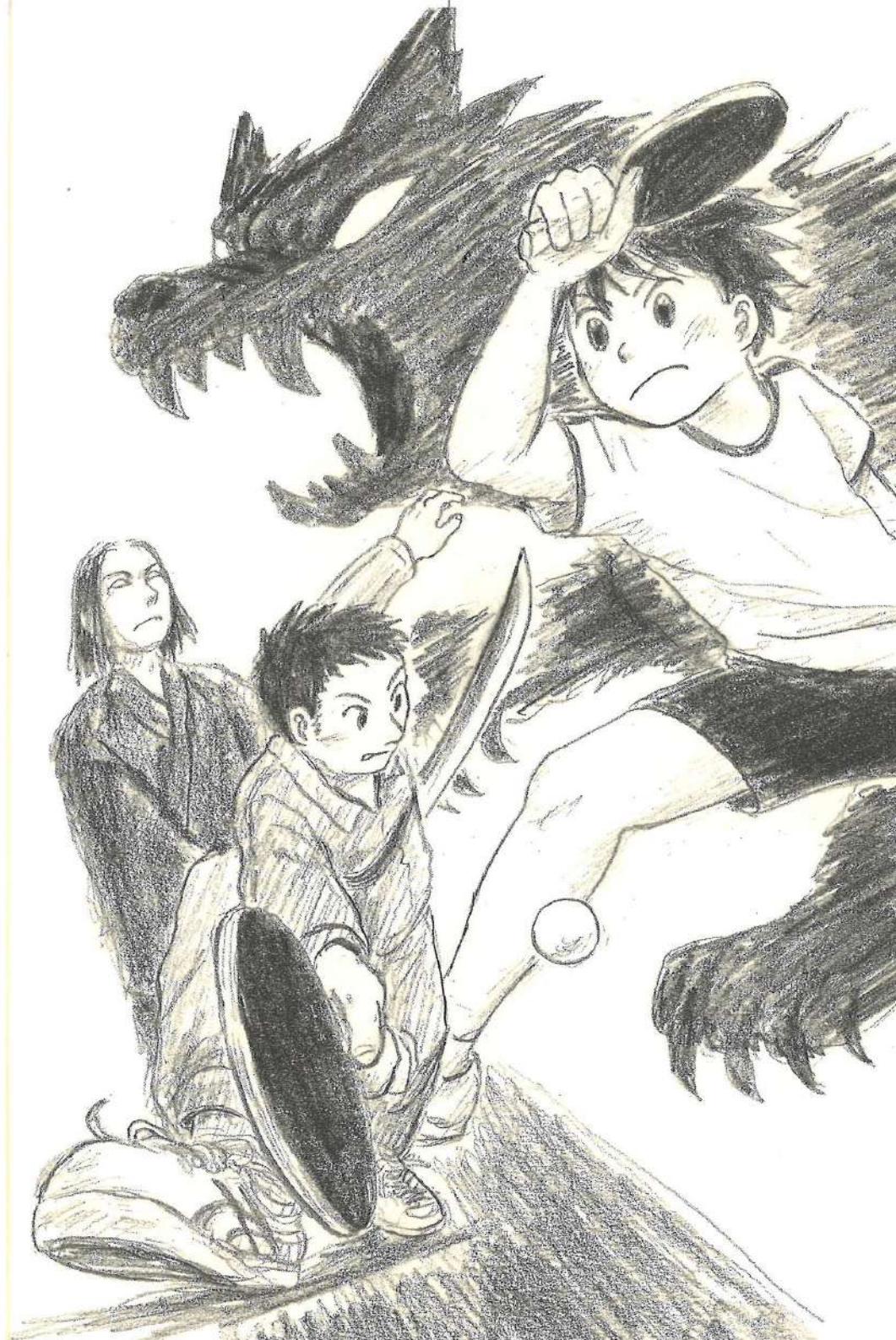
天井のライトが、たまった涙に不規則に反射し、球が見えなくなった。勘だけで球の落下を予測して、ラケットを振った。しかし、打球の感触はなかった。次の瞬間、コンと、乾いた音が床から聞こえた。足元で、コン、コンと数回、球はバウンドした。

【〇—三】

審判の純太が、カウントをコールした。

拓の様子に気づいたのか、純太が心配そうに見つめている。
(おれ、どうしたんだ)





球はまたも息づいて、牙をむいた獣のように飛び跳ねて沢田先生に突進した。沢田先生は武士のようにそれを待ち構えて、上から切り降ろす。獣と武士の戦いが、何度も繰り返された。

球を打つたびに、拓からも、沢田先生からも、うめきのような声が漏れる。その声と、床にこすれるシューズの音、そして球のはじける音。それらの音が張りつめた体育館の空気を震わせて、緊迫したラリーが続いた。

(うつ)

何本目かのドライブを打った時、拓は右腕に違和感を覚えた。筋肉が張ってきて力が入らなくなってきた感じだった。今までより、伸びのないドライブになってしまった。

沢田先生はそのドライブを見逃さなかった。床の近くまで体を沈めてカットの体勢を取り、今まで以上に右腕を鋭く振り下ろした。手首を素早く振り、腕につくほど曲げた。ラケットが見えないくらいの速さで球を切った。

その時、ゴンッと、鈍い音が床に響いた。切り下ろしたラケットが床にぶつかった音だった。その瞬間、沢田先生の右手からラケットが外れて飛んだ。前方の床にラケットは